係助詞「も」の本質

廣瀬麻矢

一、はじめに

係助詞「も」を取り巻く研究には、さまざまな面からアプローチしたものが数々存在している。意味的基準では、例えば〝達成の「も」〟（三井正孝１９９４）や、〝意外の「も」〟（沼田善子２０００）などがあり、さまざまな名称で呼ばれる「も」があることが分かる。その他にも、「も」を〝共感〟（立松喜久子１９９２）として位置付けているものもある。

しかし、係助詞「も」の本質は何か、根本的な働きは何であるのかということを疑問として掲げた場合、それらの論文で明らかにされているのは、全て文全体を見て考えられた分析、つまり結果論を述べているものが多いということがある。係助詞「も」を〝達成〟や〝意外〟、また〝共感〟の観点から捉えた論述は、「も」の働きの末端を整理することはできても、本質を追求したことにはならないのではないかと考える。

本論文ではまず、先行研究のいくつかを挙げながら、それらの問題点はどこにあるのかを探り、分類・細分化された「も」の根本となっている意味・機能を解明するとともに、係助詞「も」自身が担っている積極的な働きは何かを明らかにすることを目指す。

二、先行研究の問題点

本節では、「も」の先行研究に触れつつ、問題点を探ることにする。

・立松喜久子（１９９２）の場合

立松によれば、「も」は、

ア、聞き手に対し自分に共感して欲しいという心的引

き寄せ欲求

イ、話し手が聞き手に対して示す共感、親近感などの心的接近欲求

の二つのことを表している。アの例としては、次の1、2が挙げられている。

1、あの人も大変ですね。奨学金ももらわないで、アルバイトだけで生活しているそうですね。

2、でも仕方なかったんだ。いつまでもアングラ芝居やってるわけにもいかないものな。

これらに見られる「も」は、発話の機能を考えてみると、例1では、自分の考えに共感してもらいたいという心的引き寄せ欲求があり、例2では、感慨だけでなく、聞き手に対する働きかけ、つまり言い訳を正当化したい、自分の考えに共感してもらいたいという心的引き寄せ欲求があるとされる。

イの例としては、次の3が挙げられている。

3、君の言うこともっともだね。

この「も」は、聞き手に対して共感している、心的接近の「も」であるとされる。つまり、これら例1、2、3の「も」は、発話の機能から見ると、聞き手に対する心的引き寄せ・心的接近を表しており、従来の感動の「も」とか詠嘆の「も」とか柔らげの「も」とか言われているものに近いとされる。

しかし、果たして、右のことが「も」によって表現されていると考えてよいのだろうか。立松の結論は、「も」自体の働きを解明したのではなく、文脈によって解釈され、導かれた結論であると考える。

例1の「も」では、自分の考えに共感してもらいたいという心的引き寄せの働きがあるとされるが、その働きは、「も」自体が担っているのではないと筆者は考える。この場合、「あの人は大変である」という事実を第三者である者同士が、「大変ですね」と感想を述べるかたちで発話しているわけであって、そうなると自然にお互いが共感し合いながら発話していくことになる。つまり、「も」自体が共感の働きを担っているのではなく、文意に拠ると、そう解釈できるのだと考えられる。また、例3の「君の言うこともっともだね」に感じ取れる共感のニュアンスは、「も」自体によるものと言うよりも、そのような思いが発話以前にあることによって、この表現がとられることが考えられる。その結果、相手に対して共感している意思が表明されるのである。共感していなければ「もっともだね」とは言わないはずである。つまり、共感の働きがあると言えるのは「もっともだね」という言葉によって理解されるわけで、「も」自体が共感を表しているとは言えないと考えられる。

つまり、立松の言う「共感」の用法とは、その文が「共感」の文章だと理解できるものを指しているのであって、「も」によって表されているのではないと考える。

・伊藤健人（１９９７）の場合

伊藤は、「も」を次のように3つの類型に分けている。

①同述語命題・ＮＰフォーカス＝「も」が付加した命題とそれと対照される命題が同じ述語を持ち、それぞれのＮＰ以外は同構造であるもの。

②異述語命題・ＶＰフォーカス＝「も」が付加した命題と、それと対照される命題では、それぞれ異なった述語を持つが、それぞれの命題に社会的・一般的知識に基づく共通性があるもの。

③異述語命題・Ｐフォーカス＝「も」が付加した命題と、それと対照される命題それぞれが異なった述語を持ち、また、両命題間に社会的・一般的知識に基づく共通性もないもの。

以下に、それぞれについて筆者の理解として解説しておこう。まず①とは、述語が同じ二つの文において、後文に「も」の付加した名詞句があるものである。その例として次のアがある。（筆者注、網掛けは筆者による。以下同様）

ア、昼ごろから雨が降っていた。午後には雪も降っていた。

アは、それぞれの文が「～が降る」という同じ述語を持っており、「雪が降る」という命題と「雨が降る」という命題は範列的関係にある。但し、両命題がともに「降る」という同じ述語を持っていながら、「雪が」と「雨が」の違いにより異なった事態が表される。このとき、「雪が降る」という命題に「も」が付加されたことにより、「関連化という意味機能」（筆者注、伊藤による）が働き、〝雪以外の何かが降った〟（筆者注、「雨が降った」ということ）という事態に〝雪が降った〟という事態が累加されることが表される。

次に②とは、次のような例文にあたるものである。

イ、私は、花子に手紙を書き電話もかけたが、全く連絡がとれない。

イの「電話をかける」と「手紙を書く」という行為は、〝連絡をとる〟という意味において社会的・一般的知識に基づいた共通性が認められるものである。即ち、「電話をかける」という行為と「手紙を書く」という行為とは対照される存在である。

ウ、その地震は、震度が7で、縦揺れも激しかったと報道されている。

ウの「その地震は」に対する述語内容は、「その地震が縦

揺れが激しい」、「その地震が震度が7だ」のように異なっているが、社会的・一般的知識による〝大地震〟の状況を表現している点で、両者に共通性が認められる。

このように、命題間の範列的関係は、「も」の付加した命題とそれと対照される命題とが異なる述語の命題であるが、両命題に社会的・一般的知識に基づく関連性が認められるものである。

③は、②とは異なり、話し手の評価が共通性として認められるものである。その例として次のエがある。

エ、娘の縁談が決まり、大口の注文も入ったので、寿司をとった。

「大口の注文も入った」は、「～が入った」の「～が」の部分に他の要素が入った他の事態、例えば「お客が入った」など、と対照されているわけではない。また、「娘の縁談が決まる」という命題が表す事態と「大口の注文が入る」という命題が表す事態には、社会的・一般的知識に基づく共通性が認められないため、範列的関係②にも該当しない。ここでは、話し手の評価が共通の要因となって働いている。

話し手が両命題に、例えば、〝めでたい〟という共通した評価を認め、「大口の注文が入る」という命題に「も」を付加することにより、両命題に「関連化という意味機能」が働き、累加という意味素性が具現化されると考えられる。これは、命題全体を取り立てるものである。次のオも同じように考えられている。

オ、来週は研究発表がある。結婚式のスピーチもしなくちゃならない。

これは、「(私が)結婚式のスピーチをする」という命題と、「研究発表がある」という命題に、話し手が〝忙しい〟という共通の評価を認めたものである。

以上、伊藤の3つの類型と筆者の解説を述べたが、係助詞「も」の働きを考える上で、伊藤の示す3つの類型は果たして有用であろうか。

3つの類型に当てはまるとされている例文について考えてみると、どれも全て、「も」の代表的な働きの一つである「累加」(筆者注、かさね加えること。「添加」と同じ)の表現である。「も」の働きとして、第一番目に思い付くのが「あれもこれも」という用法である。大野晋(1993)には「モは、題目を提示するときに二つが併立している、あるいは二つ以上が併立していて、どれと決定できないということを示す係助詞だった。ハが『一つを特定』して取り上げるに対して、モは『一つではない』ことを示す助詞だった。だから、『これも』といえば、他にも同類が存在することを示し、『誰も』『何も』と使えば、『どれもこれも、すべて・・・ない』を意味するほどだった。」(337頁)とあ

る。また、大野晋（１９９５）では、「つまり『も』は、これ一つと確定しないのが原義なのです。そこから、『あれもこれも』のような添加の用法が発展したのです。」（173頁）と述べている。

アの分析では、伊藤も事態の「累加」と述べているのだが、命題間で同じ述語を持っているということが、「も」自体の働きを考える上で、重要なファクターになり得るのだろうか。ここでは単純に、雨も降り、雪も降ったという事態を表しており、「雨」と「雪」という単語の対照があれば、その下にくる述語は必然的に同じものになる可能性が高いのであって、そのことの重要度がそれほど高いものと言えるであろうか。

イやウの例文は、①とは違い、述語が異なっていることで類型化されている。しかし、ここでも「も」の働きだけに注目してみると、イの「手紙を書き、電話もかけた」というのは、これ一つと確定しない「も」の原義から展開した「累加」表現に当てはまる。ここにおいて、社会的・一般的知識として〝連絡をとる〟という共通性が認められることを「も」自体から読み取ることは不可能である。「も」は単に「累加」を表しているに過ぎない。

エやオは、述語が違い、社会的・一般的知識の共通性も認められないが、話し手の評価が認められるという点で、類型化される。しかし、これらも全て「累加」の「も」であることには何ら変わりないと考える。エの〝めでたい〟こと、オの〝忙しい〟ことは、どちらもその文から分かることであり、そのことは文が出来上がってから認められるものであって、そこから話し手の評価という共通性を見出して区別することは、結果論と言わざるを得ないのではないか。つまり、「も」の問題とは直結しないのではないか。

立松や伊藤のように、出来上がった文から判断し、述語の違いなど、部分的なところで「も」の働きを類型化、細分化していくことは、係助詞「も」自体が担っている働きを明らかにしていく上では適当でないと筆者は考える。

三、「累加」の働き

多くの「も」の例は、ほぼ「累加」の意味になると考えられるが、ここで、「も」の「累加」には、文の構造上のパターンがあることを述べておく。

前に挙げた伊藤の例ア、イ、ウ、エ、オのうち、イ、ウ、エを二文に区切った上で、それぞれを比較し、網掛け部分の構造を考える。

ア、昼ごろから雨が降っていた。午後には雪も降っていた。

イ、私は、花子に手紙を書いた。電話もかけたが、全く連絡がとれない。

ウ、その地震は、震度が7だった。縦揺れも激しかったと報道されている。

エ、娘の縁談が決まった。大口の注文も入ったので、寿司をとった。

オ、来週は研究発表がある。結婚式のスピーチもしなくちゃならない。

ア～オの「累加」には2つのパターンがある。1つは、例アのような場合である。つまり、前文と後文の関係において、後文の「も」の上接語は前文には存在しないが、述語部分については「降っていた」が共通するものである。このとき、「雨が降っていた」にかさね加えられているのは、「雪」が降ったことである。図式化すると次のようになる。

I　A―B　雨が降っていた。
　　C もB　雪も降っていた。

2つめは、例イ、ウ、エ、オのような場合である。つまり、前文と後文に同一要素が存在しないものである。例イを用いて図式化すると次のようになる。

II　A―B　手紙を書いた。
　　C も D　電話もかけた。

Iでは、Bの部分が同じなので、「も」の上接語Cだけがかさね加えられている。IIでは、A―Bの動作に対し、C―Dというもう1つの動作がかさね加えられている。

但し、IのようにA―BにCだけをかさね加えることと、IIのようにA―BにC―Dをかさね加えるパターンとは、どちらもA―Bにかさね加えられているということでは、本質的には区別されるものではないと考えられる。

四、「絶対的な取り立て」の働き

沼田善子（2000）は、「も」を次の3種類にまとめている。沼田によれば、「も」は主文に対して、常に何らかの対比的含みの生じる「とりたて詞」ということになり、3種類の分類はその在り方のちがいによっている。

ア、単純他者肯定の「も」
イ、意外の「も」
ウ、不定他者肯定の「も」

ア（単純他者肯定の「も」）の例としては、次の①を挙げている。

①（足の動きに合わせて、）自然に手も動かしている。

この「も」は、自者である「手」をとりたて、主張となる「手を動かしている」を真であるものとして肯定しているとする。同時に含みとして他者である「足」についても「動かしている」ことを真であるものとして肯定している。しかも、後掲②のように含みの肯定を取り消すような文脈とは共起しないとも述べている。

②自然に手も動かしているが、手以外の部位は動かさないでいる。

このような「も」は単純他者肯定の「も」とされる。

イ（意外の「も」）の例としては次の③を挙げている。

③（彼の放蕩ぶりには）親も愛想を尽かした。

この「も」は、「親」を自者としてとりたて、他者「親以外」とともに「愛想を尽かした」という共通の述語句に対して肯定していると見る。この点では、単純他者肯定の「も」と変わらない。しかし、③の「も」は「さえ」と置き換えても文意が変わらず、「親が愛想を尽かす」ことが極端なこととして強調されているように受け取れる。③の「も」は、次の④aを主張として断定する一方で、④bを含みとすると考えるのである。

④a　親が愛想を尽かした。

④b　親以外（例えば他人）は愛想を尽かすが、親は愛想を尽かさないと思った。

④bでは、「親以外」の他者は全て「愛想を尽かす」と肯定されても、「親」は「愛想を尽かす」ことはないと否定されている。他のものはそうでも、これだけは違うと思ったものが、案に相違して他と同じになれば意外さを感じる。意外なものには、他のものに対してよりは、より強く注意、関心が向けられる。これが強調につながると考え、このような「も」を意外の「も」とするのである。なお、意外の「も」の含みにおける他者肯定は想定であって断定ではない。従って、次のような文脈と共起することも可能である。

⑤（彼の放蕩ぶりには）親も愛想を尽かしたのに、伯父だけは彼を見捨てなかった。

この点で、②の単純他者肯定の「も」と異なるとされる。さらに意外の「も」の他者は、文脈中に明示されないことの方が多い。意外の「も」の自者は、想定で否定されるような意外性の高い極端なものであるが、それに対する他者は意外性がなく文面からだいたい予想されるものとして一括される。そこで他者は自者以外のものというだけで、あえて提示される必要がない場合が多くなるとされる。次の⑥のような例がその一例として挙げられている。

⑥緑化運動は首相も乗り出すほど、力を入れられた。

ウ（不定他者肯定の「も」）の例では次の⑦a、⑦bを挙げている。これらは文脈によっては他者が現れず、また、他者を具体的に想定しにくい場合があるとされる。

⑦a　春もたけなわになりました（が、お変わりなくお過ごしですか）。

⑦b　私も何とか無事定年を迎えることができまして・・・。

⑦aの「も」は、「春もたけなわになり、夏もたけなわになり・・・」というように「春」をとりたてるのではなく、「春がたけなわになりました」をとりたてるのであり、これに対する他者は、季節や時の推移を感じさせるほかの事柄と考えるほうが自然とされる。

また⑦bでは、「私」が「も」にとりたてられる自者で、他者は具体的に誰とは言わないが「私以外の人」と考えるのが自然な解釈に思われるとされる。しかし、そこにも一応、話し手や聞き手が想定する他者は存在するものと見ており、それに見合う形で自者の範囲（つまりフォーカス）があると考えられている。そこで、こうしたことから、⑦a、⑦bのような「も」を、不定の他者を肯定する不定他者肯定の「も」としている。

以上が沼田の見解である。本論文との関わりで注目すべきは、ウ（不定他者肯定）の用法、⑦a・bに関する論述である。筆者の考え方によれば、ウの⑦aと⑦bは区別する必要がない。⑦のaとbでは同じ「取り立て」の機能が働いていると考えられる。即ち、aでは「春がたけなわになりました」を取り立て、bでは「私が何とか無事定年を迎えることができました」ということを取り立てていると考えるべきで、⑦bが「私」だけを取り立てているとは考えられない。

半藤英明（２００１）は、次例aを挙げ、次のように述べている。

a　私は自費出版のお金を稼ぎ出すために売春まがいのこともしていました。そういう無理にも限界がきました。（『空洞星雲』）

つまり、aの「も」構文は「或ることには限界が来たが、無理にも限界が来た」という文意ではない。これは対比性が極めて薄く「絶対的な取り立て」にあると思われる。（30頁）

この考えになぞらえれば、⑦aは、「春以外のものはたけなわになったが、春もたけなわになった」という文意では

ないし、⑦bは「私以外の人は定年を迎えることができたが、私も定年を迎えることができた」という文意ではない。話し手や聞き手が⑦aや⑦bを話したり聞いたりする場合、その焦点はあくまでもa「春がたけなわになったこと」、b「私が何とか無事定年を迎えることができたこと」に当てられていて、対比する他者の存在を意識してはいないと思われる。他者の存在にかさね加えるかたちで「も」を使っているのではなく、ここではその「累加」の働きが薄れたときに現れる「絶対的な取り立て」の機能が全面的に働いているものと筆者は考える。つまり、「も」の多くは、先に述べた「累加」の意味にあるが、その意味が薄れる形で「絶対的な取り立て」による表現が現れると考えたい。

三井正孝（1994）も、「も」の「絶対的な取り立て」に関わる論を展開しているのでここで触れておきたい。

まず、三井の論から引用しておく。

> 従来〈柔らげ〉とされてきたモは、性質の程度や事柄の進行の程度、または事柄の段階や価値が〈最高値を達成する〉という意味を持つ文の場合にあらわれるのである。このことから、従来〈柔らげ〉のモと呼ばれていたものを、〈達成〉のモと呼ぶことにする。
>
> 〈達成〉のモがあらわすのは、自者が、その文の叙述内容が示す事柄において、その程度が最高値に達しているということであるから、他者は持たない。すなわち、〈達成〉のモがあらわすのは、自者自身の程度が如何にあるかということであり、他と比べて、あるいは、他者との累加において、自者が存在するわけではないのである。従って、必然的に他者を想定することはできないわけであるから、「あたかも他者がいるように」という擬制を考える必要はないのである。（206、207頁）

三井の〈達成〉のモとは、後掲の1、2である。

1、アメリカも|アメリカ、ニューヨークだ。

2、彼の店は東京も|銀座だぜ。

例1であれば、アメリカの中でも最もすばらしい（と話し手が考えている）ニューヨークだ、という、いわば価値付けがなされているというわけだが、「事柄の価値において最高値を達成している」ことが分かるのは、「も」自体からではなく、その文章全体からである。結果としてそう見えることと、「も」を積極的に使った結果分かること（言葉自体の働き）とは別である。ここでは、沼田の掲げた⑦a、⑦bの例と同様に「絶対的な取り立て」が働いていると考えることができる。

例えば、例2の「東京」と「銀座」を「熊本」と「下通り」に入れ替えた場合を考えてみよう。

3、彼の店は熊本も下通りだぜ。

文の構造は2と同様であり、「下通り」は「熊本」の繁華街としては最高値のものと判断できるが、このような文章は一般的には成り立ちにくいであろう。それには、「も」を挟む2つの地名の認知度の高さが関係していることが考えられる。言葉を入れ替えた場合に〈達成〉のモの意味が成り立たなくなるということは、その文に一定の意味環境が整っていることが必要だということであり、「も」の働きにそのようなものがあるということではないことの現れである。つまり、「達成」という概念も「も」のものではないということである。

しかし、三井は、例1、2を「他と比べて、あるいは、他者との累加において、自者が存在するわけではない」例としている。これは、それらの命題が相対化された対象ではないことを述べたものである。このことは、それらを「絶対的な取り立て」による表現と捉えていることを意味するものであると筆者は考える。

五、係助詞「も」の二面性

係助詞「も」の用法では、その原義である不確定の意から展開した「累加」の意味が最も重要であり、そして、その意味が薄れる形で「絶対的な取り立て」という機能が全面的に現れる用法が形成されると考えられる。そのような理解をすることで、一見かけ離れた「も」の二つの用法を結びつけることができる。

後掲Ⅰ、Ⅱの例は、そのような「も」の二面性を象徴的に示す例である。

Ⅰ、「累加」の「も」

①「遊ぶも勉強するも自分次第」
　　2003年10月6日　佐賀新聞・地方

②「頭がいいでも、スタイルがいいでもいい。」
　　2003年10月4日　佐賀新聞・ひろば

③大英博物館の重厚な文化遺産も拝んだし、赤れんがの建築もたっぷり味わった。
　　2003年10月4日　佐賀新聞・文化

④「ショットもパットもちょっとずつ狂っている・・・」
　　2003年10月4日　佐賀新聞・スポーツ

⑤おれも|王さんも|、おてんとさまには勝てんかったな。

２００３年10月22日　佐賀新聞・スポーツ

これらの「も」は全て、「累加」の働きを「も」自身が担っていると考えられる。次に、その「累加」の意味が薄れ、「絶対的な取り立て」の機能が現れている「も」を挙げる。

Ⅱ、「絶対的な取り立て」の「も」

⑥秋も|たけなわの１０月。

２００３年10月１日　佐賀新聞・地方

⑦「あんたも|強情だな」と籾山は笑った。

「はちまん」・上　内田康夫

⑧「せっかく鹿児島に来て、初めての食事がカレーとは、僕も|芸がないな」

「黄金の橋」　内田康夫

⑨「見張りも|大変だよな」

「東京下町殺人暮色」　宮部みゆき

⑩「刑事も|大変な商売だなぁ」

「東京下町殺人暮色」　宮部みゆき

⑪「あん人も|偉くならしたばってん、そぎゃん、偉くなる人いうのは、やっぱ敵も多いんかな。」

「黄金の橋」　内田康夫

これら⑥～⑪までの「も」は、「あれも|これも|」という「累加」の要素は薄い。即ち、これらが「絶対的な取り立て」の用法である。

このような「も」について、半藤英明（２００１）は次の記述をしている。

係助詞の文法的機能は「取り立て」であり、この機能には歴史的変化がない。従って、現代語の係助詞は、「取り立て」機能の意味的反映が表現上の意義となる。しかし、係助詞構文に見られる「強調」の要素は、古典語での実効性を現代語の範疇では失い、消滅したとは言えないが、潜在的なものとしている。（34頁）

つまり、係助詞である「も」には、「取り立て」機能が表現上に反映され、潜在的に「強調」の要素も持ち合わせているということから、「強調」とは意味的環境上、共起されやすい「共感」や「達成」、また「感動」などが「も」の用法として指摘される事態になったのではないかと考えられる。しかし、それは「強調」という概念が様々な意味のものに解釈することが可能であるということから、枝分かれ的に派生したもので、「も」の本質を追求したことにはなら

なかったとすべきである。

「も」の理解で重要なのは、「累加」の意味と「絶対的な取り立て」という機能の二面性において、表現に用法上の違いが生じるということであり、つまり、その両者が「も」の本質を示すものであるということである。

六、おわりに

係助詞「も」の本質は、「累加」の働きを表す意味的要素と、「絶対的な取り立て」を表す機能的要素の二面性があることである。機能的要素である「絶対的な取り立て」の働きは、係助詞「も」が潜在的に「強調」の意味を持っていることから、それを「共感」や「達成」、「感動」と結びつけて拡大解釈されやすい。しかし、あくまでも係助詞「も」の個性的な役割は「累加」の意味である。そして、その意味が薄れた形として「絶対的な取り立て」機能の用法がある。

「取り立て」機能と切り離して、「も」の用法を意味的に「共感」や「達成」、「感動」などに分類したのでは、全ての「も」を統一的に解釈することが困難となってくる。本論文のように、分類・細分化からさかのぼっていくことで、係助詞「も」の本質が、意味的要素の「累加」と機能的要素の「絶対的な取り立て」の二面性にあることを明らかにし得る。即ち、本論文は、「も」という助詞の在り方を理解する上で最も基本的な認識を示したことになる。

参考・引用文献

伊藤　健人（1997）「『も』の意味機能―『も』のスコープとフォーカス―」『言語科学研究　神田外語大学大学院紀要　三』

大野　晋（1993）『係り結びの研究』（岩波書店）

――（1995）『大野晋の日本語相談』（朝日文芸文庫）

沼田　善子（2000）『日本語の文法2　時・否定と取り立て』（岩波書店）

小出　慶一（1999）「とりたて詞モについて」『群馬県立女子大学紀要』第二十号

立松喜久子（1992）「共感の『も』の用法について」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要　十五』

半藤　英明（1998）「『限定』と『取り立て』の視座」『国語国文』第六十七巻第三号

――（1999）「『二分結合』をめぐる『は・も・こそ』と『が』」『静岡英和女学院短期大学紀要』第三十一号

――（2001）「係助詞の歴史と係結びの本質」『国語国文』第七十巻第十一号

三井　正孝（1994）「〈達成〉のモ―所謂〈柔らげ〉のモ―」『言語・文学・国語教育』（三省堂）

――（2001）「モの〈提題性〉―現代日本語の場合―」『日本語と日本文学』第三十二号